

中国音楽の情報ソースのベシックからニューメディアまで

— 21世紀の日中の中国音楽研究に向けての提言 —

増山賢治

(本学大学院教育学研究科)

はじめに

現在、日本において中国音楽研究を展開していくための諸条件は、同関係の中国語文献および視聴覚資料を主とする情報量の増加という点から見ると、過去とは比べものにならないほど有利になっているといえるだろう。しかし、現時点で日本の中国音楽研究がそれに見合うだけの成果を上げているかといえば、筆者の認識では率直に言って些か心許ない。確かに、それは音楽学をはじめ、文化人類学、民俗学など様々な領域によって行われるようになり、方法論も多様化している。そして、中国音楽の諸資料も学術性を有するものから商業性を帯びたもの、ジャンルのにも伝統音楽から流行音楽までと多岐に渡るものが入手可能となっている。それから、文献・視聴覚資料に加えて、インターネット、衛星放送といったニューメディアの参入によって情報の種類も豊富になり、それらの活用が不可欠になりつつある。そこで、そのような多様な情報ソースへの的確な把握、対処が研究者に求められている現状を踏まえ、21世紀の中国音楽研究へ向けて日中の中国音楽研究者は何をなすべきか、提言を試みたいと考える。

まず、中国音楽研究における文献（主に第二次資料）・視聴覚資料（一般に入手可能な既製のもの）の重要性について整理しておこう。というのは、それらに対する日本の民族音楽学者の認識が恐らく一様ではないと推測されること、より正確に言えば、中国、韓国、日本以外の地域を研究対象としている音楽研究者が、それについてどれくらい正確な認識をもっているのか実のところ今ひとつ不明瞭であると筆者には感じられるからである。それに、日本と中国の2国間に限ってみても、かみ合う議論を通じて、実りある研究成果を得るためには相互の情況、ここではすなわち、「中国音楽（研究）の情報ソースに対する日本の把握情況」を正確に認識しておくことが大前提であると考え。そして、それは同時にいずれかの機会に「中国における日本音楽（研究）の情報ソースの把握情況」が示されることへの期待をも意味している。アジアの音楽文化が多様であるように、その研究情況も国や地域によってそれぞれに異なっていることを再確認するのは決して無駄ではないはずである。

一口に中国音楽の文献資料といっても悠久な歴史をもつ伝統音楽から、例えば二胡の音楽などのように新しいジャンルまで様々な書籍や楽譜が出版されている。日本の主要中国書籍専門店の毎月の新書目録を見ると、他分野（例えば文学）に比して音楽関係のもの数は少ないとはいえ、ほぼ毎月新書が掲載されており、中国音楽の書籍、楽譜、CD、ビデオは日本でも入手がかなり容易になっていることは一目瞭然である。

田辺尚雄、瀧遼一、林謙三、岸邊成雄といった日本における中国音楽研究の先駆者たちは主として第一次資料に依拠して優れた研究業績をあげてきた。そして、その後、中国では第二次資料としての中国音楽関係の書籍や楽譜が極めて豊富に生み出され、それらも CD-ROM の時代へ突入しつつある（注1）今、同時代の中国音楽研究者には何が求められているのだろうか？ 少なくとも、筆者は民族音楽学的視点、すなわち中国以外のアジア音楽をも視座に組み込んでいる中国音楽研究者の間では、中国音楽は他のアジア諸国に比して、古くから書誌資料が圧倒的に豊富で、貴重な視聴覚資料も20世紀を通して膨大な蓄積を誇っているため、その研究に際しては目的に応じてそれらを選別、活用する能力が益々重要視されるという共通認識があると考えている。換言すれば、中国語、英語などの言語の基本的能力はもとより、中国音楽の特定の領域を専門としながら、中国音楽全体、日本、アジア、西洋と世界の音楽文化に目配りのできる可能な限り広角度な視野を備えることが不可欠であり、中国音楽にのみ知識が偏っている研究者はもはや通用しない時代になっているのではなかろうか？ その意味では民族音楽学を起点とした中国音楽研究者は先導的役割を果たす義務を負っており、中日音楽比較研究国際学術会議（注2）もそうした意味で一定の役割が期待されているはずである。それでは、次に中国音楽の諸資料・情報の日本における入手状況をすこし具体的に見てみよう。

1 文献（中国語）資料—定期刊行物、叢書、大型資料図書を中心に

中国音楽に関する各種の定期刊行物は、学報と称する主要音楽大学の研究紀要が市販されていることからわかるように、学術誌から大衆紙まで極めて多種多様である。そのうち、日本で定期購読可能なものは表1に示したとおりで、その種類は年々増加の傾向にあるが、一部できないもの（星海音楽学院学報、武漢音楽学院学報など一部の学報、および地方のものなど）もあり、早急に改善が望まれる。また、不定期刊行物だが『中国音楽年鑑』（山東教育出版社）、『戯曲研究』（文化芸術出版社）、『中華戯曲』（山西人民出版社）といった重要なものも入手可能となっている。ちなみに、中国音楽の定期刊行物において、日本音楽の中国への紹介に関する状況を見てみると、例えば『音像世界』がJ-popの情報を比較的速く報じている（注3）など、伝統音楽よりも流行音楽が一步先んじているようである。

注目される近年の大型資料図書（表2）といえば、やはり『中国音楽文物体系』、『中国民間歌曲集成』などが挙げられよう。例えば、『中国民族民間器楽曲集成』の浙江巻では民間器楽の歴史、ジャンル、楽曲、演奏の時期、場所、演奏団体および宗教音楽の概観で始まり、民間器楽の楽譜（数字譜による採譜）、宗教音楽の演奏者、演奏団体、楽器、ジャンル、楽曲などが全1978頁に渡って記録されている。このような中国全省を網羅する国家的な集成はまさに中国ならではのものであるが、これらの成果に至るまでの音源の採取、記録といったフィールドワークの方法や編集業務のプロセスなどの詳細についても大いに興味を持たれるところである。

大陸出版の単行本に関しては枚挙に暇がないのでここでは省略せざるを得ないが、研究交流という意味からも新しい傾向として注目されるのは、CD と同様に台湾や香港との合作によって大陸以外の地で出版された叢書類があり、比較的最近のものには表3のようなものが見られる。

このように文献資料が日々蓄積されていく状況下では、当然その精密なデータベースが望まれるところで、古いものに関しては『中国音楽書譜誌』、『中国音楽期刊篇目匯録』などでほぼ対応できるのだが（注4）、近年のものについては大まかな傾向は『当代中国音楽』の「音楽出版事業と期刊」で把握することができるものの（注5）、整ったものがなく、研究者個人で対処するしかないのが現状である。

ところが、日本はそれらの文献資料を入手できる恵まれた環境にある割には、その最新の情報を活用した研究成果が少ないように感じられる。実際、『音楽文献目録』（音楽文献目録委員会）の検索結果（注6）を概観してみると、中国語の文献を活用し、中国の研究成果を昇華したと思われる中国音楽プロパーの研究者によるものは少数で、テーマや内容もまさに玉石混淆の感がある。さらにいえば、近年は音楽的知識よりも中国語の運用能力（主として読解）に依拠していると思われる、いわば学際的研究が目立つ。

確かに、過去も現在も中国語で書かれた中国音楽の諸文献を読みこなすことは中国音楽研究の基礎なのだが、それですべてが解決すると考えるのは早計であろう。音楽自体への理解不足がしばしば致命的な欠陥となっている中国文学研究者による半ば趣味的な中国音楽研究のように、西洋音楽、諸民族の音楽への理解が欠如していれば中国音楽を客観的、多角的に眺めることは難しくなるだろうし、ましてや中国音楽の演奏（琴楽、江南糸竹、二胡など）を嗜んだだけで中国音楽研究者などと称するのは論外であろう。今後は大局的な見地から中国音楽の研究状況を俯瞰し、自らの研究レベルを普遍的な段階にまで高めることが必要であり、そのためには中国音楽の概念や用語をそれ以外の音楽（例えば西洋、インドネシアなど）で相当するものに置き換えて考察、あるいは説明する能力を備えることが日中の中国音楽研究者に求められていると考える。

2 視聴覚資料—CD、VIDEO、VCD、衛星放送

世界の諸民族の音楽がパッケージ化された商品、すなわちカセット、ビデオ、CD、VCDのような音楽ソフトとなって、当該の社会だけで機能するに留まらず、国境を越えて消費されるようになってきていることは周知のとおりで、中国音楽もその例外ではない。衛星放送、インターネットの普及あるいは都市におけるエスニシティの形成によって、世界各地域の音楽文化の交流が益々加速化していくことが予想される中、中国音楽の視聴覚資料も多様化、商業化が進行している。とはいえ、その一方で歴史的意義をもつ音源や、啓蒙的な内容であっても研究者が解説を施した中国音楽の録音資料が近年の日本ではほとんど全く見られないのとは対照的に、少数ながら中国では学術性を帯びたものが出版されているのを見るにつけ、ある種の安堵感を抱く中国音楽研究者は筆者だけではない。例えば、CD『中国古典音楽欣賞』は各王朝別に代表的な曲目を精選、収録（表4）し、音で中国音楽史の流れを把握できるように構成されている。解説書は修海林（中央音楽学院音楽研究所所長、中国音楽史学会副会長）が執筆している。

CDも大陸、台湾、香港との合作成果が珍しくなくなったが、そのうち特に学術性の高いものといえば大陸と台湾の協力による『典藏中国音楽大系』（表5）があり、大陸と香港の協力によるHUGOの中国音楽CDの中にも傾聴に値するものが含まれている（表6）。前者は中国芸術院音楽研究所の文献写真資料提供により、大陸の一級の民謡研究者、喬建中が監修している。音楽大学で養成されたのではない最後の世

代、1950-60年代の純粹の民間芸人による、より伝統的スタイルの演奏という意味で極めて貴重な録音となっている。後者は新しい録音ながら、優れた伝統音楽のジャンルが含まれており、特に広東系のものには出色のものが多く他の追従を許さない感がある。また録音データが整備されている点も特筆すべきである。

しかし、中国の視聴覚資料は研究資料として使用するには条件が不備なものが少なくない。録音データはおろか、出版年代さえもろくに書かれていないものもある。収録内容自体が優れているだけに、そうした必要なデータの欠如は極めて遺憾であると言わざるを得ない。

日本の近年の中国音楽研究者は見過ごしがちのようだが、欧米発行の中国音楽視聴覚資料を切り捨てるべきではなく、それらの CD（できれば過去のアナログも含めて）には特に伝統音楽に注目すべきものが少なくない。例えば表7にあげたように、西安鼓楽や広東漢楽といった日本製作の中国音楽 CD にはまったく見られない伝統器楽合奏のジャンルを聞くことが出来るのだが、それに対して日本で最近制作されている録音・映像資料は商業性を全面に押し出したものが中心で、研究資料としての使用に耐えうるものはほとんど見られないことは拙稿「国内盤中国音楽の CD に関する研究」「国内版民族音楽アンソロジーの映像資料に収録された中国音楽の問題点」で指摘したとおりである。もちろん、そうしたものも都市の音楽文化の変容の研究など目的に応じて使用すればよいのだが、日本でも学術的な要求にも耐えうる解説書付きで諸民族の音楽のレコードが制作された時期があったことを思うと、その惨憺たる現状には目を覆うばかりである。周知のとおり、SP 時代には日本は中国音楽のレコード制作に一定の貢献をしており、日本にも古いものはそれなりの価値を認めるべきものもあったが、大量の京劇音楽カセットや CD（『中国京劇有声大考』、『京劇經典唱腔典藏集』など）の出現によって発売当時話題を呼んだレコード『中国伝統音楽大集成』でさえも、解説を含めて近年の日本の中国音楽 CD のほとんどが研究上ほとんど意味なくなっているのである。同様に、近年の中国民族器楽や劇音楽の中国製 VCD（表8）の前では、日本のほとんどの中国音楽 CD、民族音楽の VIDEO や LD（注7）に収録されている中国音楽の大部分は瞬時にして色褪せてしまうだろう。特に VCD『中国民族器楽 1-10』はまさに第一級の演奏者自身による楽器や音楽の説明、演奏によって、主要楽器のほとんどが網羅されているだけでなく、和声など西洋的要素がほとんど見られないオリジナルの形で演奏されていることは極めて意義深いといえる。日本で好まれているような新しい民楽の CD とはまさに雲泥の差がある。

そして、このような録音・映像資料の意義の急激な変化に加えて、インターネットや衛星放送の参入によって、さらに情報伝達の高速化という新しい状況が生まれつつある。例えば、スカイパーフェクト TV を通じて、CCTV（中国中央電視台国際チャンネル）の放映番組を視聴することによって、中国ポップスの MTV から伝統芸能、春節文芸晚会などホットな話題を目の当たりすることができる。これで CD やビデオよりもいち早くほぼリアルタイムに最新情報が入ってくる訳である。

フィールドワークを主体とする中国音楽研究の場合でも、これらの文献・視聴覚資料や情報に目を通すのは当然であり、既製の資料で知識を増やし、耳を鍛えることが重要である。フィールドで収集する音源は第一次資料として使用されるわけであるから、その収集には細心の注意が必要で、その成果如何によって、フィールドワークの意義が問われて来るといっても過言ではないだろう。第二次資料が豊富な今日、その活用は欠かせないものとなっており、それが不十分であれば、的はずれのデータ、音源を採取してし

まうことにもなりかねない。音楽構造の分析も出来ず、演奏の正統性を聞き分けられない研究者が採取した録音による研究が横行するようでは、中国音楽研究の発展は望めるはずもなく、過去の脚本、楽譜は演奏者にとってほとんど意味をなさないことや伝統的な上演形式も知らずに、劇音楽、語り物のフィールドに赴くような研究者は必要とされなくなるだろう。

3 これからの方向性への提言

このように、情報形態の多様化、複雑化、大量化が急速に進む今日、今後の研究者には情報検索および識別能力の高さが益々求められてくると思われるが、情報は単に新しさだけが優先されるものでもなからう。古い資料からも興味深い問題を発見し、新しい意義が読みとれる場合もあるからである。『東亜の音楽』などの第二次世界大戦前の日本の中国音楽諸資料も、音源の収集、制作、出版の背景にある歴史的事実、そしてそれが研究方法に与えた影響などが看取されるという意味において、今日的視点からその意義が再検討されるべきではあるまいか。

そのように考えると、今や日本の中国音楽研究者は自らの立場を明確化し、何をなし得るかを真摯に省察するときに来ているように思われる。その際に肝要なのは日中研究者双方の立場への正確な認識であり、日本は少なくとも安易に中国に追従するだけの研究態度は戒められねばならないだろう。中国の研究成果を中核としながら、中国以外の見方も尊重され、研究のグローバル化が推進されるべきなのである。そのことは、最新版のニューグローブ音楽事典の第二版の項目「中国」を見ても明らかである（注8）。

もちろん、日本の（民族）音楽学をはじめ中国学、考古学、歴史学の成果にも留意すべきであることは言うまでもない。音楽考古学は確かに中国の方が量的には一歩先んじているが、日本でも江口淳司『東アジア原始古代楽器研究』（平成11年度広島大学大学院文学研究科考古学専攻修士論文）のように将来性ある研究が出現しており（表9）、そうしたものを埋没させておくような状態が続くようでは、日本の音楽学の情報網自体に問題があるとされても弁解の余地はないだろう。今後は日本の考古学界においても中国の音楽考古学の方法論についての比較検討、時には批判が行われることが期待される。

また、比較研究といえば京劇と歌舞伎や能との比較といった段階にいつまでも留まっているべきではなく、日中音楽交流史の視点から第二次世界大戦以前の中国の流行音楽に踏み込んだ研究も待望される所である。目下、李香蘭、テレサ・テン、「夜来香」、「何日君再来」、「彩雲追月」、カバーバージョンなどの問題を巡って、現状ではノスタルジア、ジャーナリスティックな取り上げ方が中心となっているようだが、それらも新たな視点から取り上げる時期に来ているのである。

また個別研究のほかに、大局的に中国音楽全体を見渡す努力も怠ってはならないはずである。その点については、一般向けではあるが1996～2001年の『中国年鑑』（新評論社）における拙稿「音楽」では注目の話題（音楽芸能の世界にも押し寄せる市場経済の波、音楽著作権の問題、インターネット化、体制改革など）、各ジャンルの動向（伝統音楽、西洋音楽、現代音楽、流行音楽）などをまとめているので、参照されたい。

4 まとめ

以上のような中国音楽の情報ソースの多様化はその研究にとって、多くの有利な条件を提供しているわけだが、ややもするとその負の側面を見過ごしてしまうことも銘記せねばならないと思う。情報過多は消化不良を引き起こすだろうし、本当に優れた研究、有用な資料を探し出すためには冷静な判断力と資料批判能力が欠かせないことはいうまでもなからう。そのことはニューメディアについても同様で、便宜性を優先するあまりインターネット上の中国音楽関係のサイト、HP を過信すべきではなく、やはり取捨選択の原則をもって臨むべきである。中国音楽に限らず研究者が必ずしも HP を開いているとは限らないからである。

要は、これからの日本の中国音楽研究には、日本の置かれている条件をフルに活用すること、すなわち中国人の研究をベースに日本の中国音楽研究の伝統、成果を踏まえ、さらに同関係の英文の著作（表10）にも目配りができることが求められていると考える。そのためには、中国大陸を中心に据えつつも、リベラルな立場でどれだけ広角度に対象を見ることができかが最大のポイントとなると思われる。各種の資料と同様、研究も中国のコピーでは無意味なのである。

本稿は第4回中日音楽比較研究国際学術会議（2001年11月22日、沖縄県立芸術大学）の基調講演をもとに内容を増幅、改訂したものである。

表

表1 日本で定期購読の可能な期刊（一部舞踊、劇音楽および不定期刊行物を含む、*は広島大学で備えているもの）

【学術的性格のもの】

- * 音楽研究 人民音楽出版社
- * 中央音乐学院学报 中央音乐学院
- * 中国音楽 中国音乐学院
- * 中国音楽学 中国芸術研究所
- * 音楽芸術 上海音乐学院
- * 交響（西安音乐学院学报） 西安音乐学院
- * 楽府新声（瀋陽音乐学院学报） 瀋陽音乐学院
- * 音楽探索（四川音乐学院学报） 四川音乐学院
- * 舞台芸術 中国人民大学書報資料中心
- * 中国音楽教育 人民音楽出版社

ほか

【学術的性格ではないが、情報源として重要と思われるもの】

- * 音楽週報 北京市文化局
- * 人民音楽 中国音楽家協会
- * 楽器 全国楽器工業信息中心

* 音楽創作 中国音楽家協会

* 音像世界 中国唱片總公司

ほか

【一般向きのもの】

音楽天地 陝西省音楽家協会

音楽生活 遼寧省文聯

音楽愛好者 上海音楽出版社

中小学音楽教育 浙江省文聯

音楽与表演 南京芸術学院

国際音楽 中央人民広播電台

北方音楽 黒流江省文聯

音楽世界 四川省音楽家協会

ほか

【舞踊】

舞踏 中国舞踏家協会

【中国伝統演劇の雑誌ではあるが、劇音楽研究のためには備えておきたいもの】

* 中国京劇 文化部振興京劇指導委員会

* 戲曲芸術 中国戲曲学院

中国戲劇 中国戲劇家協会

戲曲叢刊 山東省文化庁

ほか

【定期購読が待望されるもの】

中国音楽報 中国音楽家協会

音楽学与研究 (天津音楽学院学報)

黄鐘 (武漢音楽学院)

星海音楽学院学報

民族民間音楽

ほか

表2 注目される近年の大型資料図書 (広島大学所蔵のものを中心に掲載した)

《中国音楽文物大系》總編輯部『中国音楽文物大系 (北京卷)』大衆出版社 1996

《中国音楽文物大系》總編輯部『中国音楽文物大系 (湖北卷)』大衆出版社 1999

《中国音楽文物大系》總編輯部『中国音楽文物大系 (天津陝西卷)』大衆出版社 1999 刊行継続中

《中国民間歌曲集成》全国編輯委員会『中国民間歌曲集成』人民音楽出版社 中国ISBN中心

《中国民族民間器楽曲集成》全国編輯委員会『中国民族民間器楽曲集成』 中国ISBN中心
 《中国戯曲音楽集成》編輯委員会『中国戯曲音楽集成』 文化芸術出版社
 《中国曲芸音楽集成》全国編輯委員会『中国曲芸音楽集成』 中国ISBN中心

ほか

表3 台湾や香港との合作によって大陸以外の地で出版された叢書類

蕭興華『中国音楽史』（《中国文化史叢書》⑩）、文津出版社、台湾、1995
 劉靖之主編『民族音楽研究叢書』香港商務印書館、香港大学亜州研究中心

香港民族音楽学会1989-

『民俗曲芸』財団法人施合鄭民俗文化基金会 継続中

『中国伝統音楽研究計画系列』新文豊

※『朋友』（朋友書店親書目録188号、2000年9月）より抜粋

- 1 道教儀範 閔智亭編著
- 2 龍虎山天師道音楽研究 曹本冶、劉紅編著
- 3 中国道教音楽史略 曹本冶、王忠人、甘紹成、周耘、劉紅編著
- 4 禅林讚集 蔡俊抄、曹本冶合著
- 5 上海白雲觀施食科儀音楽研究 曹本冶、朱建明合著
- 6 貴州土家族宗教文化儺壇儀式音楽 鄧光華著
- 7 河北鉅鹿道教法事音楽 袁静芳著
- 8 嶗山韻及膠東全真道器楽曲研究 詹仁中著
- 9 蘇州道教科儀音楽研究—以天功科儀為例展開的討論 劉紅著
- 10 中国新疆維吾爾族伊歎蘭礼儀音楽研究 周吉著
- 11 「武當韻」—中国武當山道教科儀音楽研究 王忠人、劉紅、周耘著
- 12 無錫道教科儀音楽研究 錢鉄民、馬珍媛著
- 13 佳県白雲觀道教科儀音楽研究 甘紹成著
- 14 杭州抱朴道院道教音楽研究 曹本冶、徐宏図著

ほか

表4 CD『中国古典音楽欣賞』（CCD-98/920~925 中国唱片總公司 1998）の構成と収録内容

タイトル	収録曲目
先秦・漢魏六朝	楚商（曾侯乙編鐘と楽隊）ほか11曲
唐	春鶯囀（合奏）ほか14曲
元	海青拿天鵝（琵琶独奏）ほか13曲
宋	蕭湘水雲（古琴独奏）ほか19曲
明	洞庭秋思（古琴・簫・二胡）ほか12曲
清	滄海竜吟（合奏）ほか10曲

表5 CD『典蔵中国音楽大系』の構成内容

典藏中国音楽大系①弦管伝奇 (TCD-1019 風潮有声出版有限公司、1996)

楽器名「楽曲名」 (演奏者)

二胡 「二泉映月」(阿炳)「苦中楽」(衛仲樂)「二琴光亮」(孫文明)「流波曲」(孫文明)

京胡 「哭皇天」(楊寶忠)「八叉」(楊寶忠)

四胡 「八音」(孫良)

馬頭琴「巴雅齡」(色拉西)

笛子 「喜相逢」(馮子存)「揚州小開門」(魏永堂)「下調駐雲飛」(袁子文)「蔭中鳥」(劉管樂)「梅花三弄」(陸春齡)

管子 「大二番」(楊元亨)「放驢」(楊元亨)

唢呐 「大合套」(袁子文)「風攪雪」(魏永堂)

古琴 「空山憶故人」(查阜西)「流水」(管平湖)「長門怨」(管平湖)「瀟湘水雲」(吳景略)

古筝 「豎斷橋」(趙玉齋)「高山流水」(高自成)「出水蓮」(羅九香)

琵琶 「大浪淘沙」(阿炳)「青蓮樂府」(衛仲樂)「霸王別姬」(李廷松)

板鼓 「快鼓段」(朱勤甫)

典藏中国音楽大系②土地と歌 (TCD-1020風潮有声出版有限公司、1996) では各種の労働作業歌の第一次資料が収録されている。

表6 HUGOレーベルによる中国音楽CD

HRP758-2 西安鼓楽 (大吉昌鼓楽社)

HRP7149-2 潮州大鑼鼓 (林運喜主鼓、汕頭嶺海絲竹社)

HRP706-2 広東小曲 (蘇文炳領導、広東伝統硬線楽隊)

HRP7123-2 微之憶薛濤 (甘明超による南音)

表7 歐米レーベルによる注目すべき中国音楽 (伝統器楽合奏) のCD

【西安鼓楽】

CHINA EARLY MUSIC FROM CHANG'AN, INEDIT CD W 260036

【広東漢楽】

Chinese Han Music-Zheng Melodies "Above the Clouds", IN5701 1995

【遠南吹打楽】

MUSIQUE DU MONDE, CHINE:MUSIQUES DE LA PREMIERE LUNE, SACEM 92612-2

MUSIQUE DU MONDE, CHINE:LA BANDE DE LA FAMILLE LI, SACEM, 92613-2

【広東音楽・江南絲竹・福建南音などのオムニバス】

Sizhu (絲竹) Silk Bamboo, Chamber Music of South China, PAN 2030CD

CHUIDA WIND AND PERCUSSIVE INSTRUMENTAL ENSEMBLES, UNESCO D 8209

表8 近年の中国民族器楽のVCD

【中国民族器楽1-10】（吉林省教育音像製品出版社発行、広州鴻翔影視有限公司発売）

収録楽器と演奏者（括弧内）

中国民族器楽1 馬頭琴（齊・宝力高）・冬不拉（庫尔曼江・孜克熱巫）

中国民族器楽2 熱瓦普（達吾提・阿吾提）・四胡（趙双虎）

中国民族器楽3 簫（張維良）・箏（俞晓冬、李莹）

中国民族器楽4 笛（詹永明）・古琴（李祥庭、曾成偉、謝孝萃）

中国民族器楽5 琵琶（林石誠）・笙（胡天泉）

中国民族器楽6 巴烏（王鉄錘）・板胡（沈誠）

中国民族器楽7 二胡（閔惠芬）・京胡（楊乃林）

中国民族器楽8 管（胡志厚）・壎（曹建国）

中国民族器楽9 揚琴（項祖華、代茹）・三弦（蕭劍声、趙承偉）

中国民族器楽10 唢呐（胡海泉）・都它尔（木沙江若孜）

表9 江口淳司「東アジア原始古代楽器研究」の目次

第一章 『東アジア原始古代楽器研究』のねらい

第一節 研究の目的、研究史

第二節 卒業論文『古代楽器研究』の内容

第三節 修士論文『東アジア原始古代楽器研究』の研究目的と方法

付記 用語解説

第二章 『楽器』資料

第一節 中国大陸

第二節 朝鮮半島

第三節 日本列島

第三章 東アジアの音、音楽

第一節 東アジアの楽器の関連性

第二節 東アジアにおける金属音の関連性

第三節 金属音変遷のモデルケース

第四節 青銅器祭祀と祭器に関する解釈論

第四章 金属音器の移動から見た対外交渉

第五章 東アジアにおける各地域の音、音楽の意義

第一節 中国大陸

第二節 朝鮮半島

第三節 日本列島

参考文献

別冊 資料編

表10 英文による中国音楽関係の最近の著作

- SHEN, SIN-YAN "Chinese Music and Orchestration:A Primer on Principles and Practice"
Chinese Music Society of North America, Chicago USA, 1991
- WICHMANN, ELIZABETH "Listening to Theatre THE AURAL DIMENSION OF BEIJING
OPERA" UNIVERSITY OF HAWAII PRESS HONOLULU, 1991
- Jones, Andrew F. "Like a Knife Ideology and Genre in Contemporary Chinese Popular Music"
Cornell University East Asia Program, 1992
- WITZLEBEN, LAWRENCE J. "Silk and Bamboo Music in Shanghai The Jiangnan Sizhu
Instrumental Ensemble Tradition" The Kent University Press Kent, Ohio,
and London, England, 1995
- Jones, Stephen "FOLK MUSIC OF CHINA Living Instrumental Traditions"
CLARENDON PRESS OXFORD, 1995
- Stock, Jonathan P.J. "Musical Creativity in Twentieth Century China Abing (阿炳),
His Music, and Its Changing Meanings" University of Rochester Press, 1996
- LAM, Joseph S.C. "STATE SACRIFICES AND MUSIC IN MING CHINA Oxythodoxy,
Creativity, and Expressiveness" STATE UNIVERSITY OF NEW YORK PRESS, 1997
- Schimmelpenninck, Antoinet "Chinese Folk Songs and Folk Singers Shan'ge (山歌) traditions in
Southern Jiangsu" CHIME Foundation Leiden, 1997

脚注

- 注1 CD-ROMとして『中国民楽、器楽知識与演奏技法』武漢大学出版社が『内山書店目録』（2001/6）17頁に掲載されている。
- 注2 中日音楽比較研究国際学術会議とは隔年開催による日中の音楽研究者による国際会議で、この度（第四回）ははじめて日本で催された（2001年11月22日～25日）。
- 注3 『音像世界』では日本コーナーが設けられ、常時 J-pop の動向を報道しているだけでなく、日本のミュージシャンのMTVが付録 VCD としてつけられるときもある。
- 注4 中国芸術研究院音楽研究所資料室編『中国音楽書譜誌（先秦－1949年音楽書譜全目）増訂本』（人民音楽出版社、1994）、中国芸術研究院音楽研究所資料室編『中国音楽期刊篇目匯録1906-1949』（文化芸術出版社、1990）
- 注5 《当代音楽》叢書編輯委員会『当代中国音楽』（当代中国出版社、1997）の第三十一章「音楽出版事

業と期刊」(pp.687-702)では1989年全国音楽報刊統計表が掲載されている。

注6 筆者開講(平成十三年度)の音楽学特講の課題として広島大学教育学研究科(音楽)の大学院生(菅敏子、石黒美代子、井手口彰典、緒方深恵、金森信午、古賀弘之、志賀有希子、高田艶子、藤野久美、三浦栄理子、渡辺奈緒)が『音楽文献目録』から中国音楽関係の論著を収集した検索結果を作成した。学生諸君には改めて感謝を意を表したい。ただ、『音楽文献目録』にも何らかの事情でそこには収録されていないものもあり、そのことは別途の検討事項として銘記されるべきであろう。

注7 『世界民族音楽大系』、『新世界民族音楽大系』、『アジアの音楽と文化』など

注8 最新版のニューグロブ音楽事典(THE NEW GROVE Dictionary of Music and Musicians, EDITED BY Stanley Sadie, Macmillan Publishers Limited 2001)の項目「中国」は中国語の最新文献と英語文献を駆使した斬新な内容となっている。その記述には欧米の民族音楽学の立場が反映されており、これこそが同事典の本来のあり方と思われ、同辞典の1980年版の翻訳をベースに項目によって大幅に手を加えた日本版「ニューグロブ世界音楽大事典」(講談社、1994)の「中国」はその存在意義を問われているといえなくもない。

主要参考文献(表にあげたものは省略)

ニューグロブ世界音楽大事典(講談社、1994)

THE NEW GROVE Dictionary of Music and Musicians, EDITED BY Stanley Sadie, Macmillan Publishers Limited 2001

増山賢治「音楽」(『中国年鑑2001』、新評論社、2000)

《当代音楽》叢書編輯委員会『当代中国音楽』(当代中国出版社、1997)

中国芸術研究院音楽研究所資料室編『中国音楽期刊篇目匯録1906-1949』(文化芸術出版社、1990)

中国芸術研究院音楽研究所資料室編『中国音楽書譜誌(先秦-1949年音楽書譜全目)増訂本』(人民音楽出版社、1994)

主要参考視聴覚資料

【レコード】

中国伝統音楽大集成(史料としてのSP原版復刻)GB-7001-7030 日本コロムビア 1980

【カセット】

中国京劇有声大考 XO181-1~181-30 北京文化芸術音像出版社 1990

【CD】

典藏中国音楽大系①(弦管伝奇)TCD-1090 風潮有声出版有限公司 1996

典藏中国音楽大系②(土地与歌)TCD-1020 風潮有声出版有限公司 1996

SP復刻版による田辺尚雄監修『東亜の音楽』COCG-14342 日本コロムビア 1997(1941)

中国古典音楽欣賞(先秦・漢魏六朝・唐・宋・元・明・清)CCD-98/921~925 中国唱片總公司 1998

京劇經典唱腔典藏集系列之四・菊壇絶唱 COCS401~424 皇龍文化事業股份有限公司 1997

HUGOおよび欧米レーベルのものについてはそれぞれ表6、7を参照。

【VCD】

中国民族器楽1-10 吉林省教育音像制品出版社 広州鴻翔影視有限公司 出版年代不明